

阿蘇中岳火口から2014年8月30日に噴出した火山灰

阿蘇中岳火口から8月30日に噴出した火山灰は、変質岩片及び鉱物片、硫黄粒子を主体とし、淡褐色の発泡した火山ガラス質粒子を少量含む。淡褐色ガラス片は火山ガスとともに噴出しているマグマ物質と考えられる。

阿蘇中岳火口から8月30日に噴出した火山灰を観察した。試料は8月30日午前11時ごろ、中岳北東約2kmの仙酔峡付近で気象庁により採取されたものである。

採取された火山灰は、そのほとんどが径 $250\mu\text{m}$ 以下の細粒粒子からなる。構成粒子は、その大半が様々な程度に変質した火山岩片、硫黄片などからなり、これらは火口底の堆積物などに由来すると考えられる。これらのほか、マグマが急冷したものと考えられる褐色ガラス質粒子が少量（数%）含まれる。褐色ガラス質粒子の大部分はブロック状の破断面に囲まれた、発泡度の低いものである。これらの粒子の大部分はガラス光沢をもつ平滑な表面を持つため、変質・溶食作用を蒙っていない新鮮な粒子であると判断した。なお、表面が新鮮なガラス質粒子のほか、変質あるいは溶食により表面の光沢を失ったガラス質粒子も存在する。これらのガラス質岩片の特徴や含有量は、6月下旬に産総研・熊本大学により採取された火山灰中のガラス質岩片とほぼ同じである。なお、6月及び7月に採取された火山灰試料に普通に見られた黒色球状の自然硫黄粒子はほとんど含まれず、黄色の硫黄粒子が目立つ。



図1 8月30日火山灰の光学顕微鏡写真。赤矢印はマグマ物質と考えられる発泡した褐色ガラス質粒子，橙矢印は自然硫黄と思われる黄色粒子。